

1、小銭の亡者

九月に入っても、太陽はやるきまんまん。昨日、母ちゃんに刈りあげられた首すじが、焼けるようにあつい。ながれおちる汗がカミソリのあたった肌にしみる。

ぼくはとなりのショウちゃんを見た。ショウちゃんの頭は、スポーツ刈りだ。ぼたぼたと、毛の根元から汗をかいているのに、丸刈りのぼくよりずっとかっこよく見える。

「その頭、ずりいなあ」

「ん？ ああ、えへへ」

ショウちゃんはまんざらでもなさそうに頭をかく。

「昨日、父さんの仕入れについていって、五百円カットっていう美容室で切ってもらった」

ここは愛知県南知多町の日間賀島だ。

愛知といっても内地とはなれた海にうかぶ島で、島の人口は二千人ちょっと。島の外周は六キロほどで、自転車をぶっとばせば二十分たらずで一周できる。

島の小学生で内地の美容室にかよっているのは、ショウちゃんくらいだ。ぼくらとおなじ六年生の女子でも、庭さきで母親に髪の毛をきってもらっている。

ショウちゃんの家は、富田商店という酒屋だ。月に一回内地へ店の商品の仕入れに行く。ぼくの家は安井サイクルというレンタル自転車屋なので、たまにしか内地へいけない。

「ぶっ、だっせえなあ」

ぼくはかっこいいと思ったのに、弟のコウジが口をはさんだ。

「せっかく名古屋にいくんだからさ、今、はやりの美容室でカットしてもらえばいいのに」

コウジはさらさらの前髪をかきあげた。見ているこっちがあつくるしくなる。

コウジは自分の髪の毛を自分で切る。あわせ鏡の前で何時間もかけて格闘しているすがたを見ると、母ちゃんにバリカンで切ってもらえばいいのにと感じてしまう。

「はやりかなんだかしらないけど、夏に長袖なんて着て、バカじゃねえの」

「黄ばんだTシャツやろうに、いわれたくないんだけど」

「なんだとキザやろう」

ぼくは、ショウちゃんのむこうがわの双子の弟にかみつく。三人で歩くと



きは、いつもこのならびだ。ぼくが右側、まんなかにショウちゃん、左側にコウジ。

ぼくらは兄弟でしかも双子なのに、外見も性格もにてない。

弟のコウジは色白で背が高く、美人の母さんそっくりだ。ぼくは色黒で背が低い父ちゃんににている。そして、もっと雰囲気かにているとおどろかれるのが、漁師のじいちゃんだ。

でも、ぼくはうれしくない。じいちゃんは、ぼくよりもコウジと仲がいいから。東港のそばにあるじいちゃんの家へいくと、コウジとじいちゃんはいつも二人ではなしをしている。

「まあまあ、スケっち、そんなにいらいらしないで」

なだめるショウちゃんの横顔を、思わずにらみつける。ぼくは自分のあだ名がきらいだ。

安井幸助と安井幸二

上三文字がおなじ漢字のせいで、ぼくは友だちからコウちゃんとよばれない。いつのまにか、コウスケのスケをとってあおとよばれている。

ークラスしかない同級生から名前をよばれるとき、スケっちよりもコウちゃんの方がうれしいにきまっている。とくに女の子によばれるときは。

「コウジ、おくれてるぞ！」

「おくれてねえよ！」

ぼくらはきゆうな坂道をのぼって、島のまんなかにあるスーパー植松にむかっている。

植松は、日間賀島にあるたった一軒の食料品店だ。食べもののほかに、トイレットペーパー、洗剤、靴下、鉛筆といった生活雑貨もごちゃごちゃと売っている。

ぼくらの目当ては、ペロペロくんというアイスだ。一本六十円とは思えない大きさで食べごたえもじゅうぶん。ソーダ味の氷をかじるところを想像しただけでよだれができる。

「ところで、ショウちゃん、昨日、植松にペロペロくんが入荷されたのはたしかなんだよね？」

ただでさえ植松のアイスは売り切れが多い。

今日みたいに放課後に買いにいくと、冷凍庫はからっぽということもけっこうある。

「まちがないよ。植松のおばちゃんから、直接はなしをきいたんだもん。たまたま同じフェリーにのりあわせただ」

ぼくはフェリーにしばらく乗ってない。前に乗ったのは虫歯の治療のときだ。

「新発売のコーラ味も入荷したっていったよ」

「えっ、マジ？」

「今、テレビのコマーシャルで流れてるやつ？」

五歩くらいおくらしているコウジも食いついた。ショウちゃんが首だけで、コウジにふりむく。

「そうだよ。でも、コーラ味は数がすくないって」

「えええーっ！」

めずらしく兄弟で声がかさなった。

「たのむよ、ショウちゃん。そんなだいじなこと、どうしてもっと早くいわないんだよ」

自然と速足になる。今日は月曜日だ。低学年の子たちはとっくに授業がおわっている。

「ソーダ味のペロペロくんでも、おいしいじゃん」

ショウちゃんのはのんびり屋さんだ。

「コーラ味かぁ」

ぼくは興奮してきた。手の中の六十円をにぎりしめる。内地ではとっくに発売されている菓子も、海にかこまれた日間賀島で食べられるのはかなりあとだ。

そのくせテレビでは、新商品のコマーシャルが耳に焼きつくほどながれる。ぼくらは指をくわえて、植松のおばちゃんが入荷してくれるのをまつしかない。

「なぁ走ろう！」

ぼくはショウちゃんのでかい横腹をつついた。植松はもうすぐそこだ。この坂をのぼりきり駐在所の前を駆けぬければ、植松の前の駐車場もかねた空き地にでる。

「でも、コウちゃん、あんなところにいるよ」

「あいつ、なにやってんだ？ 腹でも痛いのか？」

いつのまにか、コウジは一人だけ、道のはしのやぶの中を歩いていた。

「そっち側は日に焼けるだろう」

「はいっ？」

ぼくはあきれて裏声になった。ショウちゃんは、くくくと笑いはじめた。笑いだすと止まらない。

「紫外線はお肌にわるいからさ。日焼けするなら、ちゃんとしたサロンにくってきめているんだ」

コウジは女の子みtainなことをはずかしげもなくいう。頭はいいけれど体力のない弟を、ちょっと心配してやったのに。

「もう、二人とも好きにしろよ。コーラ味がのこっていても、とっておいてやらないから」

パッと、ぼくはかけだした。運動神経なら日間賀小学校のだれにも負けない。

しかし、頭に血がのぼって肝心なことをわすれていた。いつもはきをつけているのに、ぼくはあまりにも無防備に駐在所の前を走りぬけた。

こんなに暑い日は、アイツは神社の鳥居のわきでまちぶせていることが多かった。それなのに、今日にかぎって空き地の車のかげにひそんでいるなんて。

「ほうれ、見て行ってちょー！」

いきなりあらわれたばあさんにぶつからないよう、ぼくは両足で急ブレーキをかけた。そのままバランスをくずして、砂利の上に尻もちをついた。

「行ってえ！」

「ひゃはは、げんきがええのう」

ばあさんはあやまりもしない。一瞬、ぼくは怒るか逃げるかまよってしまった。

その一瞬で、ばあさんはきいきい音を立てる一輪車、通称ネコ車で、車と車のあいだをふさいだ。再び、すきっ歯をのぞかせて、勝ちほこったように奇声をあげる。

ショウちゃんは、だいじょうぶ？　なんていいながらのこのちかづいてくる。コウジは空き地の手前で立ち止まった。

小山ハルエには、ぼくらがしているだけでもたくさんのよび名がある。

おっかけばあさん、おし売りばあ、金の亡者、小銭の亡者。ふつうにハルばあさんとよぶ人は少ない。

こんなにきらわれているのに、ハルばあは声をかけてくる。つぎはぎだらけのもんぺをはいて、白いよれよれのシャツを着て、ほっかむりの手ぬぐいで汗をぬぐいながら、

「ほうれ、なんか買ってちょー」

ぼくらに笑いかける。

ネコ車には、いつもの発泡スチロールの箱がのっている。中身は見なくてもわかる。ハルばあはスチロール箱を、きゅうきゅう鳴らしてふたをあけた。

「ひゃーっ！」

「うわーっ！」

にがてな音に、ぼくは身ぶるいした。ショウちゃんは耳の穴をほじっている。三メートル後ろのコウジでさえ、おしっこをがまんしているようなかっこうになった。

これはワナだ。ぼくらの足をうごけなくするために、わざと音を立てる。そのすきに、ハルばあはスチロールのふたの上にタッパーに入った商品をならべる。

「きたねえぞ！」

「きたなくにゃあわ。ちゃんと手を洗ってこしらえてきただよ、腹こわさねえから安心してちょー」

そのキタナイじゃない。

けれども、反論しても、いい返されるだけだ。あっ、植松のおばちゃんがガラス越しに見ている。タ・ス・ケ・テ！　ぼくは口ぱくで、おばちゃんに合図を送った。

それなのに、植松のおばちゃんは手のひらを上にむけて降参のポーズをとった。自分の店の客をとられているのに、苦笑いをうかべて店のおくへきえていく。

「そんなあ」

植松のおばちゃんは、前に一度、ハルばあに注意をしたことがある。あのとき、ハルばあはひらきなおって駐在所へつれていけとわめきちらしたのだ。「骨せんべい十円、アジのフライ三十円、キスの天ぷら四十円、それから、今日は、ちーとばかしめずらしいもんをこしらえてきたがね。どこへいったかのう」

また、ハルばあは発泡スチロールを鳴らした。

「あった、あった、これだぎゃね」

植松の空き地で、ハルばあは商売をはじめた。

さがしていたのは中くらいのタッパーだった。こんがりあがった丸いドーナツのような物が入っている。スパイスをきかせてあるのか黒こしょうの粒が見える。

「からあげだぎゃね」

「えっ、からあげ？」

からあげは、ショウちゃんの大好物だ。思わぬ新メニューの登場に、ショウちゃんの足が青いネコ車に吸いよせられる。コウジも身をのりだす。

鶏のからあげなら、ぼくも食べたい。でも、ちょっとまて。なんだか形がおかしいぞ。魚のヒしらしきものがついている。すみっこのやつは魚の尾じゃないか。

「ショウちゃん、だまされるな！ そいつは鶏の肉じゃない！ 魚だ、魚のからあげだ」

「へっ？」

ショウちゃんの足が止まる。ぼくはいつでも逃げられるように身がまえた。前をふさがれても、車の後ろ側からまわりこんで、植松の店内へとびこめばいい。

「おみゃーさん、さすがユージローさんとこのお孫さんだがね。大当たりだ。カワハギのからあげだ」

「なーんだ」

コウジはぼくらを見捨てて歩きだした。

「これえ、兄ちゃん、またんか！」

金切り声で、ハルばあが叫んだ。声の大きさと迫力に、ぼくの背すじがしゃんとなる。となりで、ショウちゃんはきをつけのポーズになってかたまっている。

「ボクは弟ですけど」

いい返したものの、さすがのコウジも立ち止まった。

「まだ、はなしのさいちゅうだぎゃあ。人のはなしは、しまいまできかにはならん」

自分のことを棚にあげて、ハルばあは説教する。子どもを相手に商売をしないでくださいという学校の先生のはなしに、まるできく耳をもたないくせに。

「高温の油でかりっとあげたから、骨までぱりぱり食えるでよ。味見してみ！」

ハルばあは味見用のかけらを、指でつまんでさしだした。

再び、ショウちゃんの足がうごきだす。ぼくはため息をついて空を見あげた。さっきまで、ヒーヨロヒーヨロと鳴いていたトンビがいない。雲一つない青い空にでっかい太陽。

「あっちいなあ」

体の水分は干からびて、からんからんだ。

ショウちゃんはぱりぱりといい音を立てて、カワハギのからあげを食べている。一個また一個。音だけきいていると、うまそうにきこえるからやっかいだ。

「どんな味がする？」

コウジも興味があるようだ。

「これ、おいしいよ。しょうゆの濃いところがうまい。コウちゃんも味見してみたら？」

「しょうゆ味ね……」

コウジはつぶやくと、お肌が車のかげに入るように、うんこ座りになった。あわよくば、ショウちゃんのおこぼれをもらおうというこんたんだろうか。なんだか、むかつく。

ぼくもたまにショウちゃんにおごってもらうけれど、ぼくとショウちゃんは親友だ。コウジはぼくのしるかぎり、ショウちゃんと二人きりで遊ばない。

しかし、悲しいかな。ぼくら兄弟の一カ月のこづかいは、二人あわせてもショウちゃんには及ばない。だから、コウジのきもちがわからないでもない。

「うみゃーだろう？ カワハギのからあげ、今日だけ特別価格で一切れ二十円でどう？」

ハルばあは手もみしながら、ショウちゃんの顔をうかがう。ショウちゃんはちらっと、ネコ車の荷物に目をやった。商品のほとんどが売れのこっている。

「おれ、二個買うよ」

ショウちゃんはやさしい。家が商店のせいか、ハルばあをにがてにしているのに、売れのこりはきになるらしい。見ちゃったらおしまい。いつも買わされてしまう。

ハルばあもよくわかっていて、ショウちゃんには泣きおとしをつかう。これが売れないとおまんまが食えないとか、薬を買う金がないとかいって、悲しそうにする。

「ありがとさん。たすかるわあ。二個で四十円な」

「はい、お釣りをもらえる？」

ショウちゃんは百円玉をさしだした。なるほど。からあげを二個買ってあげても、ペロペロくんを買う六十円があるのだ。さすが金持ちの考えることはちがう。

けど、ショウちゃん、甘いな。ハルばあが金の亡者ではなく、小銭の亡者とよばれているのをわすれたの？ ハルばあは硬貨の枚数がへるような商売はしない。

「お兄ちゃん、そりゃあむりっっちゃうもんだがね。百円玉を一つもらって、十円玉を六つかえしたら損してまうがね」

ほらね。ぼくはショウちゃんの腕をひっぱった。

「もう、いこうよ」

「へっ？ 損してないよ。ちゃんと、おばあちゃんは四十円をもうけてるよ。なんなら計算式をかいてあげようか？」

「ちがうんだってば。計算ができないんじゃないかって、ハルばあのこだわりさ」

ぼくは一人のとき、このおし問答をやられたことがあるのだ。五十円玉を一枚だして、二十円の釣りをくれといっても、ハルばあはいやだといひ放った。

「銀色一枚と、土色二枚をこうかんしたら、ぜにっこが一枚へってまうがね」

あげくのはてに、ぼくはアジのフライを二個も買わされるはめになった。

十円まけてやったんだからと、よくわからない恩まできせられて。

「今さら、いらねえはなし。もう、ビニール袋に入れてまったから買ってくれなこまる。ほうれ、四十円ちょーよ！」

ショウちゃんが十円玉をもってないとわかると、ハルばあはぼくに袋をつきだした。ぼくに対しては顔色をうかがうなんてことはしない。

菓子ばかり食べるから頭がわるいだの、カルシウムをとらないから背がのびないだの、ぐさぐさと、ぼくの心にささる言葉でこうげきしてくる。

腹を立てたり、ハルばあの相手をするのがめんどうくさくなったりすると負けだ。きがつくと、売り言葉に買い言葉で、けんかのようになにか買わされてしまう。

「ショウちゃん、ほんとうにカワハギなんかほしいの？」

「ただのカワハギじゃにゃあ」

ハルばあが口をはさむ。ショウちゃんほうなずく。

「じゃあ四十円をたてかえるから、この二十円とその百円をあわせてペロペロくんを二本買って」

ショウちゃんは、わりいと頭をさげる。ぼくは汗でべとべとの十円玉を四枚つまみ、ハルばあにわたした。

「ひいふうみーよー、いひひ」

ハルばあは四十円をうけとると、黄ばんだ巾着の中へ一枚ずつおとしていく。巾着を耳もとでゆらして、ちゃりんちゃりんという音色をしあわせそうにかみしめる。

何度見ても、うすきみわるい。大の大人がたった四十円でよろこぶなんてどうかしている。もっとおかしいと思うのは、はるばあは紙幣が好きではなさそうなのだ。

以前、ショウちゃんが千円札をだしたとき、うけとるのをしぶった。硬貨をつぼに入れて家の床下にうめているという、うわさをきいたこともある。

「それじゃあ、植松にいこう」

ぼくとショウちゃんは、ネコ車のわきをすりぬけた。と、なにを思ったのか、ずっとだまってぼくらのやりとりをながめていたコウジが、ハルばあにはなしかけた。

「そんなに小銭が好きなら両替してもらえばいいじゃん」

「もういくぞ」

「だってそうだろう？ 郵便局にいけば、一円にも五円にも十円にもこうかんしてもらえるのに」

コウジは立ちあがった。それから、ぽーんと手の中の硬貨を放り投げると、空中でキャッチした。

「やめろっ！」

ぼくは思わず叫んでいた。今日、コウジがもってきた金は五百円のはずだ。

今の五百円玉、ハルばあに見られたらどうか。ハルばあは、硬貨の中でも五百円玉をこよなく愛している。おそろおそろ、ハルばあをふりむく。次の瞬間、

「ひゃーっ、ひゃははは！」

愛する五百円玉との出会いに、ハルばあは本日一番の雄たけびをあげた。

ぼくはパニックになって今きた坂道をかけおりてしまった。スーパー植松からどンドンとおざかる。ショウちゃんもふうふう息を切らしながらついてくる。

必死なのはコウジだ。五百円玉をとられないように、ズボンのポケットにしまいこんだ。しかし、ハルばあは狙った獲物をかんとんにあきらめたりしない。

「なんか買ってちょーよ！」

「だから、これは雑誌を買う金だ！」

コウジが声をはりあげる。毎月、コウジは植松のおばちゃんにたのんで、メンズビューティーという男性用ファッション誌を仕入れてもらっている。

ぼくは一度だけ雑誌をぬすみ見たことがある。

男の人がポーズをきめて、紙面に写っていた。金色の長い髪の毛の人、くるくるパーマの人や、小さなリボンをたくさんつけている人もいた。見るだけで、はずかしくなった。

西港よりの海岸にでたときには、ぼくの息はすっかりあがっていた。ショウちゃんなんて、足もとがふらふらだ。コウジの顔色は赤をとおりこし青冷めている。

「おばあちゃん、元気だなあ……」

ショウちゃんは膝に手をついた。

「コウジ、いったん砂浜にでるぞ」

ひさしぶりにコウジが、ぼくのいうことをきいた。三人で進行方向をかえる。

ネコ車をおして観光客にみやげ物を買ってもらう、いわゆるネコ車ばあちゃんは日間賀島に大勢いる。けれども、だれもハルばあの足腰にはかなわない。

しかし、砂浜ならはなしはべつだ。一輪車のタイヤはさらさらの砂の上ではスピードがでない。水分をふくんでべちゃべちゃの波打ち際ならなおさらだ。

「コウジ、五百円玉を見せたらどうなるかしらなかったのか？ このあいだ、観光客ともめたってさ」

「そんなのしるか」

「おれもしらない」

ぼくは父ちゃんからきいたはなしを二人に伝える。

「たまたま子どもがもっていた五百円玉を手に入れるために、ネコ車の商品をぜんぶ、おしつけたの」

コウジはだまりこんだ。

「たった五百円で、商品をぜんぶあげちゃったの？ それってぜったいに損してるよ」

ショウちゃんは、こんな目にあわされているのに、ハルばあの心配をした。

「ショウちゃんはお人よしだなあ」

「あ、ありがとう」

なぜか、ショウちゃんは礼をいった。むこう側でコウジが鼻で笑った。ハルばあとぼくらとの距離はかなりひらいている。とりあえず計画どおりだ。

ハルばあは、砂にうもれるネコ車のタイヤと格闘している。おまけにぶかぶかの長靴をはいているので、足もとに力が入らないらしくて、ぐらぐらゆれている。

「勝負あっただな」

コウジは自分の作戦が成功したみたいという。ぼくらは走るのをやめた。「父ちゃんがいうには、観光客の女の子がもっていた五百円玉はめずらしい記念硬貨だったらしい」

「ああ、おめでたいことや、オリンピックの開催を記念してつくられる一回り大きな五百円玉だね」

ショウちゃんは歩くスピードをおとした。

「それなら、このあいだ、じいちゃんに見せてもらった」

コウジの言葉が胸にささる。ぼくは記念硬貨をテレビで見たことはあるけれど、実際にさわったことはない。

「その子は財布のおくに大切にしまっておいた記念硬貨を、まちがって取りだしちゃったんだって」

砂浜をぬけて東港にちかづく。けっきょく、ぼくらは島を一周している。いったいなにをやっているのだろう。おもしろくないきもちがこみあげてくる。

「見られたら、さいご。ありったけのみやげ物とこうかんに、五百円の記念硬貨をとりあげられた」

さっさと、ぼくははなしを切りあげた。

「その子の親が怒って、観光協会にどなりこんだとか？」

コウジの問いに、ああと短い言葉で答えてやる。

「いくらお買い得でも、女の子は、ネコ車いっぱい魚をもらってもうれしくないだろうね」

ショウちゃんはため息をつく。

ネコ車ばあちゃんの売るみやげ物のメインは、一夜干しだ。イカや小魚をひらいて乾燥させた干物。たいていは三袋で千円、中には四袋で千円のふくろもある。

ぼくら島の間人にとっては、ネコにやるような小さな魚、通称ザコでも、少し手をくわえれば観光客のみやげ物になる。ハルばあも観光客にはこれを売る。

「だれもないね」

人の気配のない砂浜に思わずつぶやく。

「平日だしね」

「夏休みはおわっちゃったしさ」

やるきがあるのは太陽だけだ。毎日が祭りみたいに、にぎやかだった夏休みがうそのようだ。かき氷やフランクフルトをかた手に歩く観光客も、水着姿のお姉さんもない。

親とはぐれて泣き叫ぶ子どもも、レンタサイクルにまたがるお兄さんたちも、銀色のサングラスをかけた釣り人もいない。砂浜のむこうに青い海がひろがっている。

「なあなあ、植松にもどろうよ。もうソーダ味でもいいから、ペロペロくん

を食いたいよ」

「ああ、そうしょうか」

ぼくらはすっかり油断していた。

ハルばあにちょっとずつ距離をちぢめられているなんて、思いもよらなかった。三人の足が道路へむいたとき、ここぞとばかり、ハルばあはしかけてきた。

「まてまてまてーっ！」

ネコ車のタイヤの一部をうかせて、突進してくる。走るというよりも、砂の上をすべっている。立ちつくすぼくらの目のまえで、それは起こった。

パッカーン！

突然、ネコ車のタイヤがパンクした。ハルばあはいきおいがついたまま空をとんだ。そして、尻から砂浜におちて、その反動で岩に頭をぶつけた。

ゴッちゃん！

ハルばあが死んだ。三人ともそう思った。だから、かすかなうめき声がきこえたとき、

「生きてるよ！」

ぼくらはハルばあにかけよっていた。

ハルばあは左足をおさえて、顔をしかめている。砂浜にちらばった魚の惣菜を踏まないように、こわごわと頭をのぞきこむ。よかった、血はでていないみたいだ。

「ショウちゃん、どうしよう？」

がくがくと、膝がふるえだす。いつもそうだ。ぼくはかんじんなときに弱虫だ。コウジのように冷静でいられないし、ショウちゃんのように大胆に行動できない。

「今、おれたちにできことをすればいいんだ」

ショウちゃんは、ふーっと息を吐く。ぼくもまねをする。ショウちゃんが考えていたのは時間にして三秒くらいだ。

「馬だ。体育の時間に作った騎馬戦の馬になろう。ハルばあを乗せて診療所へはこぼう。いい？」

「わ、わかった」

「ったく、めんどくせえなあ」

そうはいうものの、コウジも騎馬にくわる。ぼくらはすばやく騎馬戦の馬を作ると、せーので、ハルばあをかついだ。ハルばあの体から、むんっと線香のにおいがした。